

氏 名（国籍）	きむ 金	ひょ 孝	すん 順（韓 国）
学 位 の 種 類	博 士（文 学）		
学 位 記 番 号	博 乙 第 2092 号		
学位授与年月日	平成 17 年 2 月 28 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	芥川龍之介の文化観 －女性・西欧・アジア・階級をめぐる－		
主 査	筑波大学教授	博士（文学）	荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授		新 保 邦 寛
副 査	筑波大学教授		名 波 弘 彰
副 査	筑波大学助教授	博士（学術）	秋 山 学
副 査	筑波大学助教授	博士（文学）	吉 原 ゆかり

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、大正時代を代表する芥川龍之介という作家のアイデンティティーを中流階級の日本男性・知識人と規定し、その視点による文学が対象とする女性、西欧、アジア、階級という問題を＜主体＞と＜他者＞という軸を設定して考察するものである。なおこの論文が規定する大正時代とは、日清日露戦争後、日本の国際的地位が向上することによって、明治時代の知識人が構築した文化的・文学的所産をその土台としながらも、明治時代の国家・社会・文化が孕まざるをえなかった矛盾に対する反省と批判によって知識人たちを内省化させていった時代と概括される。

本論文は 4 部構成をとり、序章・結章を除いて全 11 章から成り立っている。その構成は以下の通りである。

〔本論文の構成〕

序章

第一部 大正時代の女性と芥川文学の女性表象

第一章 『青年と死と』に見える女性表象

第二章 『偷盗』の作品構成に占める女性表象の類型性

第二部 芥川文学の西欧文明との出会いと女性表象－芥川の開化物を通して－

第三章 『舞踏会』論－西欧人の眼差しが捉えた日本女性－

第四章 『手巾』論－ネイティヴ・インフォーマント（Native Informant）に対する批判－

第五章 『雛』に見られる両義的女性性－子供性・忍耐・非合理－

第三部 芥川のアジアに対する眼差し－脱中心化の方法論の獲得－

第六章 中国旅行を通じての社会意識の成長－『支那遊記』の言説を中心に－

第七章 日本中心主義への批判－『將軍』の叙述構造を通して－

第八章 ＜周縁＞の価値の発見－『桃太郎』論－

第九章 日本の外部（周縁）世界の価値の発見とその挫折

第四部 プロレタリア文学に対する認識と死

第一〇章 『侏儒の言葉』に表れた国家と階級

第十一章 『文芸的な、余りに文芸的な』論 - プロレタリア文学に対する認識とその限界 -

結章

概要は次のようになる。第一部では芥川文学の女性表象について検討されている。芥川文学の女性論のもっとも大きな特徴は執筆動機についての作者の言及にもとづいて、実生活での体験がただちに作品のモチーフにつながると解釈され、作中のモデルを実在した人物に求め、かつ芥川のにがい体験に根ざすことによって、女性の造型を＜悪の根源＞と捉えようとするものだった。しかし芥川は実生活の告白を嫌悪し、現実を理知によって解釈し読書を通じて築かれた架空の世界で虚構化するという方法に固執した作家である。そこで第一章では初期習作である戯曲『青年と死と』に登場する女性が作品の主題に関わってどのように表象されているのかを分析している。その結果、『青年と死と』の作品の構図と主題、女性表象がその執筆前後の翻訳作品アナトール・フランス『バルタザール』とテオフィル・ゴーチエ『クラリモンド』という西欧キリスト教圏の作家の作品のそれと酷似していることが明らかになったとする。これらの作品は共通して、宗教的真理を追求する若い男性たちが、性的快楽の生活を克服して＜聖＞の世界に入るという構図を取り、その中で女性たちは男性を誘惑して＜罪＞と観念される快楽の世界に導く＜悪の根源＞の役割を演じていると分析された。

そのような女性表象の特徴は同じく初期作品である『偷盗』にも類型的に捉えられるというのが第二章の考察となっている。能動的で主体的に生き、弱者への思いやりを持っている沙金は＜悪の根源＞として表象され、夫の悪行を忍耐する猪熊のお婆は自己犠牲を強要される忍従的な女性表象の典型として造型されている。それに反して、生まれつきの白痴で苦しい生を生きる阿濃は、その純真無垢さと母性の豊かさによって美化され、闇の世界を救済する存在として表象されている。しかし当の女性の生そのものは作品の内部で救済されることはないかと捉えられる。

第二部では日本人の男性作家として、芥川の西欧オリエンタリズム言説への批判意識を開化物と呼ばれる作品を中心に分析されている。第三章で対象となる『舞踏会』はフランスのピエール・ロティの『秋の日本』の一章「江戸の舞踏会」をふまえたものである。ロティの作品では日本の女性は外形的にも、内面的にも徹底的に美の基準から疎外されていた。それに対して芥川は、同じ女性を外国語の実力と自然な舞踏の実力も兼ね備え、内面世界まで完璧な存在として美化する。それは西欧白人のまなざしに反発するためであった。その姿勢と意識には日清・日露戦争など強大国との戦争での勝利によって、近代文明国家の仲間入りをしたという自負心が基底をなしている大正時代のエートスが反映していると捉えられている。西洋への反発を通して芥川は日本近代の文化・文物を美的に描こうとしたのだが、西洋白人の眼を意識することによって相対化された眼差しを持つようになったと捉えられる。その眼差しがのちの脱中心化、自己の他者化という芥川の方法論の自覚へとつながるというのが本論文の主張である。

第四章の『手巾』は、武士道を西洋人に紹介した新渡戸稲造の美意識を、彼をモデルとする長谷川先生の人物造型を通して批判した作品として分析されている。長谷川先生は日本の武士道を西洋人向けに西洋人の価値基準によって言説化し、自ら東西の架け橋として自負している。しかし彼がもう一人の主人公西山夫人の姿を見つめるまなざしには生動感が感じられない。それは西山夫人が息子を失った悲しみを伝える場面で、先生は彼女に共感するというのではなく、悲しみを表現する行動の美にのみ捕らわれているからであって、そのような美意識をこの作品では痛烈に批判しているとする。

第五章の『雛』という作品は明治という前時代に対して、次の世代の人の立場で相対化して見るとき、浮

彫りになってくる問題を取り扱った作品である。維新と近代化の波から押し流された伊兵衛の家族は、生計のために娘の＜雛＞まで売り渡さなければならないくらいに没落した。＜雛＞に表象される日本の伝統文化をめぐる人々の葛藤、或いは近代化という時代の流れにうまく乗れず周辺に押し流される明治人の運命が繊細に描かれているとする。しかし＜雛＞への執心から逃れられないままに、忍耐と服従を強いられる母、感情的で非合理的な幼いお鶴といった女性の不当な描写には、当時の公教育を通じて一般化されていた家父長的な家族国家主義や伝統的な男性中心主義の論理から、作家芥川が自由でなかった事実があかされるとする。この点は第一章の女性表象に通ずるとされる。

第三部では、日本人としての芥川のアジアに対する対外観の特徴と脱中心化の方法の獲得の過程をたどっている。まず第六章では芥川が中国旅行を通じて中国の現実に関し、日本帝国主義と軍国主義の矛盾に目覚めたとされる。その結果、中心文化に対する周縁としてのアジア文化の価値を認識し、日本文化を相対化してみる眼差しを獲得する。しかし元来彼の中国観が書籍を通じた想像の産物であった点、また当時の日清・日露戦争の勝利による日本の国際的地位の向上から来る優越感、さらには新聞社の特派員という制約のため、自分の認識を積極的に発表するまでには至らなかった。そのような限界から『支那遊記』では、芥川自身が批判した西欧のオリエンタリズムが東洋の民族文化を他者化したように、中国の現実を貧困で無礼で不潔なものとして他者化するという姿勢が認められるとする。しかしやがて周縁文化の価値認識と＜脱中心化＞の方法は、帰国後発表した『將軍』『桃太郎』『湖南の扇』『俊寛』『第四の夫から』等の作品で具体化されると捉えられる。

第七章の『將軍』は、N 將軍を様々な視点人物（主体）から批判させるという多元的な構造を取ることによって＜脱中心化＞の方法を具体化した作品として分析される。つまりこの作品では、モデルの乃木將軍の批判にとどまらず、さらに進んで、乃木將軍や軍国主義を批判する周辺の視点人物（主体）の不条理と虚構性を批判するようになる。というのは、この作品が発表された雑誌『改造』では、すでに乃木將軍は進歩的な知識人たちの間で帝国主義の象徴として批判の対象となっていたからで、この作品はむしろ N 將軍を批判する複数の視点人物の言説への批判に向かい、西欧中心主義的価値観を盲信する日本人の没主体性を批判するというものであったとする。

第八章の『桃太郎』は、日本帝国主義を賛美・高揚する国定教科書の桃太郎教材の善と悪との関係を逆転し、桃太郎は利己的で矛盾だらけの人間で搾取階級あるいは侵略的な帝国主義の象徴とさせられ、鬼は気候もよい豊かな天然の楽土に住み、戦争を好まず、平和で善良な存在とされている。その意図は日本中心主義を批判するに止まらず、鬼ヶ島に象徴される＜周縁＞と位置づけられる東アジア諸国家の固有の文化価値を認めようとする＜脱中心化＞の方法を用い、さらには自己及び日本人を＜他者＞とするところにあった。周縁文化の存在価値を主張する方法論と作家精神は同じ時期に発表された『俊寛』『第四の夫から』『湖南の扇』等にも拡大されてゆく。これらの作品は共通して日本人とその文化を外部の世界から眺め、日本文化中心主義を批判し周縁文化の存在価値を主張しようとした作品とされる。これが第九章の考察である。たとえば『俊寛』の主人公は都の価値で島の生活を批判しない。その代わりに、島の人、島の食べ物といった生活全般をありのままに受け入れ、満足し安住しようとしている。『第四の夫から』は西欧化された日本の近代文明・文化から離れ、世界の文化の多様性をチベットの民族生活に追い求めることで日本の近代を相対化する作品とされる。最後に『湖南の扇』では処刑者の血を吸ったビスケットをその愛人の女性が食べるという気味悪いエピソードを、それが中国古典のロマン的世界に通じることから肯定してゆくとする。そこには西欧化された東アジアの近代なるものへの芥川の激しい反発が裏打ちされているとする。ただこれら作品に共通する欠点は、感動・生命力に欠けているということであるとする。その原因は芥川のブッキッシュな創作態度が現実の人間の描写を妨げたためであって、彼の作家精神の具現は失敗に終わったと結論づけられる。

第四部では、中流階級の知識人としての芥川の階級意識によるプロレタリア文学に対する認識が検討され

ている。プロレタリア雑誌『種蒔く人』の創刊と有島武郎の「宣言一つ」等によって、文壇でも文芸と階級の問題が急浮上した状況で、芥川の『侏儒の言葉』は執筆された。このエッセイはまさに当時の日本社会の状況と関連して文学と階級の関係が省察され、自身の志向した文学が実践できなかったと告白する自己批判の述懐となっていて、そのような自分の姿を軽蔑して嘲笑的自虐的に＜侏儒＞と規定したと捉える。それゆえに彼は自己の挫折の原因を中流階級という階級的限界に求めざるをえなかったと結論づけられる。これが第一〇章の結論であるとすれば、第一章の『文芸的な、余りに文芸的な』では芥川は自分の文学観に照らしてプロレタリア文学観を表明するものとして分析される。彼にとって、プロレタリア文学の出現は歴史の必然であり新しい時代の文学であるが、現在の達成度を見た場合、未完の状態にあるとされる。その原因は芸術性「詩的精神」が欠けているからだと認識される。しかしその一方で、社会的意識と芸術性とを同時に実現することがいかに難しいかを見抜いていた。芥川のこのような矛盾する認識は、たんにプロレタリア文学との関係から生まれたというよりも、「新時代との距離」－国家・社会・労働運動との距離－を保とうとする彼の文学の方法論と人生態度から来た結果だとする。しかしそれゆえに社会の現実在即した文学の実現ができない自分の限界をもまた一方で自覚していたと認める。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の成果として評価すべきは、本論文が対象とした芥川作品に、これまでの芥川論では分析されなかったことのない新たな眼差しと方法論を見出したことにある。現代批評理論（ポストコロニアリズム、オリエンタリズム、フェミニズム）が批判する西欧中心主義、男性中心主義、日本中心主義、それに階級意識による特権化などを纏いつかせた＜主体＞から＜脱中心化＞しようとする作家の眼差しと方法論が作品に内在化していることを精緻な作品分析を通して証明したことであった。周知のように、現代社会・文化の批評理論によれば、言語あるいはイデオロギーに従属することによってはじめて＜主体＞が成立するとされる。しかし芥川はその＜主体＞からの＜脱中心化＞という自己認識を重視した。そのために芥川にとっては＜主体＞が所有しないすべてのこと、＜主体＞ではないもののすべてが周縁的な＜他者＞の問題として浮上することになるはずである。もちろん芥川がこのような今日の批評理論の概念である＜主体＞や＜他者＞、＜脱中心化＞のような用語を知っていたはずはないが、本論文は芥川の文学にそのような批評精神が内在することを分析している。この＜他者＞の立場で＜主体＞を＜脱中心化＞しようとする芥川の姿勢と創作方法は、特に明治時代の開化を素材とし、文明批判の性格を帯びている開化物、あるいは中国旅行や関東大震災の体験から日本帝国主義や軍国主義の矛盾を自覚して以後執筆した一連の作品群に認められることを明らかにしている。

この成果は、本論文が芥川龍之介という作家の作品を、時代と相関させ日本の外部の世界から読もうとした問題意識によって見えてきたものといえる。このような＜他者＞の眼差し、＜脱中心化＞しようとする姿勢を作品内部に捉えようとする作品研究は、従来の芥川研究にはなかったというだけでなく、芥川文学が現代において世界文学として読まれる地平を切り開いたとも評価できる。特に韓国での芥川文学研究においては、日本の文学を外部の世界の目で読むとき、新しく見えてくる意味と価値を明らかにするものであった。この成果を通して韓国の日本文学研究者は日本の内部の研究の一方的な受容者の立場では決してなく、作品の意味の再生産にともに参加できる可能性を提示することになった。このことは韓国での芥川研究、あるいは韓国での日本文学研究の意義の見直しにもつながるものと信ずる。

ただしこのように評価できる本論文にも欠点はある。その一つは＜他者＞と＜脱中心化＞の眼差しと姿勢を強調するあまり、『舞踏会』の背後に見据えられるオリエンタリストのピエール・ロティへの反発、あるいは『手巾』の長谷川先生に仮託された新渡戸稲造をオリエンタリズムのネイティブ・インフォーマントと

捉える分析は、オリエンタリズム、ポストコロニアル批評を生硬なかたちで外部から適用しているにすぎないと批判せざるをえない。これら二作品は必ずしも本論文の主張する芥川の眼差しと姿勢を内在化させているとはまだいえない。したがってむしろ芥川の限界あるいは未熟さを指摘すべきだったと批判できる。

いま一つは、第一部から第三部にわたっては、精緻な作品論で十分新しいことを言いえているのに、第四部になると一転して芥川のエッセイを対象として芥川の肉声を捉えようとしている。このことは本論文の一貫性を損なう欠点をもたらした。作品から捉えられる芥川像はあくまでも仮構されたそれであって、そのあとにエッセイの芥川の肉声を接ぎ木するとすれば、仮構された芥川像を実体的に捉えるといった誤りを犯してしまうことになる。本論文としての一貫性を保つには、やはり第四部にも晩年の芥川の文学作品を対象にすべきではなかったかと惜しまれる。

ただし以上のような欠点の本論文の優れた成果を否定するということにはならない。むしろそれらの欠点は本論文の著者の力量からすれば、ただちに乗り越えられるものと確信している。本論文は日本の芥川研究に新知見を提示したにとどまらず、韓国の日本文化・文学の研究者たちを大いに刺激することが予測される。その点からも大いに評価すべきものである。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。